

大串明弘作 「マネー・イズ・ベスト」

<前編>

(効果音) (オフィスの喧騒。電話の鳴る音。)

小松幸子 お肌を若返らせるレジーのカネゾウ化粧品です。

(効果音) (電話が切れる音。ブツ。ツーツーツー。)

幸子 全く、信じらんない!

(効果音) (幸子の受話器を乱暴に置く音。)

加治木のぞみ どうしたの、幸子?

幸子 大体さあ、「お肌を若返らせるレジーのカネゾウ化粧品です。」なんて、普通言わせる?

のぞみ まあね。でもテレビであれだけ CM 打ってコマーシャルやってるから、必死なんじゃない? ただでさえ売り上げ落ちてるのに、あれだけ経費使っちゃうと、ちょっとねえ。

幸子 やっぱりのぞみは考えることが違うよね。さすが社長令嬢。

幸子ナレーション わたしの名前は小松幸子。二十歳^{はたち}の OL。公務員をしてる両親から、いつも、就職するなら公務員か安定した大企業にしなさいと言われていたので、高校を出ると、化粧品業界では1、2を争う大企業のカネゾウ化粧品に、迷わず就職した。ところが入ってみると、給料は安いボーナスもスズメの涙。仕事は、だれでもできるようなコピーやお使いが多くて、雑用係のようなもの。でも、当産する大手企業が出てきてるから、まだちゃんとお給料もらっているだけましなのかなって思ってる。わたしの唯一の趣味は貯金。夜も頑張ってるバイトをしてるんだけど、そのバイトが結構時給よくって、社会人2年目にして500万円たまった。稼いだお金を貯金して、通帳を見るのが本当に楽しい。なんか、お金がたまればたまるだけ、人生にゆとりが出てくるって感じがする。いざと言うときに頼りになるのがお金だからと、両親が常日ごろ言っていたが、何となく分かってきた。今一緒に話してたのは同僚の加治木のぞみ。よくは知らないんだけど、お父さんが社長さんをしているらしい。その影響か、彼女も将来独立して、会社を経営して高収入を得るのが目標だそうだ。

木原ともみ でもうちの CM って、いつもダサくない? もっとかわいい子使えばいいのに、いつも同じ女優使うんだから。

ナレーション 彼女は木原ともみ。わたしとは違って浪費家。お給料のほとんどは遊びや洋服に消えるらしい。よい子なんだけど見かけにこだわる方だ。そのくせ、隣の部署の15歳も年上のダサイおじさんと付き合っている。近々結婚するらしい。ほんとに人間はよく分からない奇妙な動物だ。

ともみ ねえねえ、幸子って、彼氏いるの？ なんか最近ちょっと服装変わったみたいだけど。

のぞみ わたし、見たよ～。駅で男の人と待ち合わせてんの。結構いい雰囲気だったけど、あの人が彼？

幸子 まあね。

ともみ うっそー！ 幸子にもやっと彼氏できたの？ 信じらんない。

幸子 おいおい、それは言いすぎじゃないかあ？

のぞみ で、どこで知り合ったの？

幸子 夜のバイトしてるお店のお客さんなんだ。常連さんで、店長さんともすごく仲がよくなって、こないだ店長に紹介されて、それからかな。

ともみ あ、赤くなってる。幸子も照れることがあるんだ。へえ～。

のぞみ ほんと、照れてる照れてる。

幸子 そんなことないよ。だって、付き合ってるって言っても、彼氏ってわけじゃないし。こっちは好きでも、向こうは同じ風に思ってくれてるかは分かんないもん。

のぞみ へえ～。そんなに気に入ってるんだあ。見てみたいなあ、その彼氏。

ともみ ともみも見たーい！ ねえねえ、今度みんなデートしようよ。みんなで彼氏連れてきてさ。ね、のぞみ？

のぞみ そうだね。やっと幸子にも彼氏できたことだし、トリプルデートと行きましようか。

ナレーション 今まで彼氏いない歴20年だったので、友達ともほとんど恋愛の話はしなかったが、のぞみにも前から付き合っている彼氏がいるらしい。

ともみ じゃあ、今週の土曜日にディズニーランド行かない？

のぞみ 出た出た。お決まりのコース。

ともみ いいじゃない。ともみミッキー大好きだし、“ホーンテッドマンション”に慎ちゃんが入るの好きなんだもん。

幸子 どうせともみのことだから、「キャー、怖いー」とか言ってくっついてんでしょ？

ともみ バレた？ じゃ決まりね。

のぞみ 全く強引なんだから。彼に聞いてみるね。

幸子 わたしも聞いてみる。

ナレーション みんなには夜のバイトは居酒屋の店員ってことになってるんだけど、実はスナックでお客様の話し相手になって、お酌をしたりカラオケを歌ったりしている。別にお客さんも普通のいい人ばかりだから、何も変なところはないんだけど、何となく誤解されそうだから、みんなには黙っている。彼との出会いもそうだった。鈴木健太さんといって、一人暮らしなのに、いつもシャレたスーツにセンスのいいネクタイを締めてお店に来る。地方の国立大学を卒業後、上京してアパレル業界に就職した。青森の実家にいるご両親は体が弱く、わたし

よりもたった2つ上なだけなのに、自分の生活を切り詰めて毎月10万円も仕送りしているそうだ。東京には出てきたばかりで、友達もいないので、お店には唯一の息抜きとして来ているんだって。そんな彼の子供のように無邪気な笑顔と、モダンなスーツを着ても田舎の人の雰囲気隠せないところが、わたしはいつの間にか好きになってしまった。彼はわたしのことをどう思ってるかよく分かんないけど、わたしにとっては初めて好きになった大切な人だ。でも、彼忙しそうだけど、行けるかな？

ともみ で、やっぱりディナーは“カリブの海賊”の中のレストランだよな？ あそこってすごくムードいいし。ね、幸子、聞いてんの？

幸子 あ、ごめん。聞いてるよ。そうだね。でもディズニーランドなんて久しぶりだなあ。
のぞみ わたしも。高校の時以来だなあ。

ともみ え？ 彼氏と行かないの？

のぞみ うん。あんまり彼とは遊びに行かないから。

幸子 え？ いつもどうしてんの？

部長(女性) あんたたち、何の話をしてるのかな？

幸子 いえ、ちょっと週末の打ち合わせで…。

部長 ちょっとじゃないでしょう。さっきからずーっと話してたじゃない。それに、遊びの打ち合わせなら仕事が終わってからにしないかい。(入ってきた専務に)あ、専務、お疲れ様です。あ、今度のゴルフコンペ、どこにしましょうか？ 結局、どなたがいらっしゃるんです？…

ともみ 言ってるそばから、自分だって遊びの話してるじゃん。

幸子 ほんとほんと。でもなんか楽しみになってきたね、週末。

ナレーション その日の夜、バイトに行くとするで彼が来ていた。カウンターでマスターたちと一緒に楽しそうに飲んでる。どうして、こんなに気さくな人なのに会社では友達ができないのだろうか？ 彼に言わせると、東京の人はギスギスしていて冷たくて怖いって言うんだけど…。

鈴木健太 あ、幸ちゃん！ 今日も一日お疲れ様。と言ってもまだお仕事終わってなかったね。

幸子 ううん。最近、ここ、すごく楽しくなっちゃったから、何だか遊び感覚なの。

鈴木 マスター、あっちの隅のテーブル使っていい？ ちょっと彼女に相談事があるんだけど。

マスター どこでも使ってちょうだい。

幸子 相談って、どうかしたの？

鈴木 うん、実はね…。

ナレーション そう言うと、今までの明るさがどこかへ吹き飛び、彼はしばらく黙り込んでしまった。

幸子 鈴木さん、どうしたの？
ナレーション 何があっても、いつも明るい鈴木さんしか見たことがなかった。わたしは何だかすごく心配になり、できることなら何でもしてあげたい、そんな気持ちがこみ上げてきた。

幸子 わたしでよかったら、何でも話して。
鈴木 前に、田舎のおやじが手術したって話したじゃん。
幸子 うん、聞いた。
鈴木 入院が長引いちゃったから、結構お金かかっちゃってさ。家を担保にお金借りただけけど、実は支払いが滞ってたらしいんだ。おれに心配かけまいと思って黙ってたらしいんだけど。おふくろも一生懸命働いたんだけど、病弱だろう？いくらも稼げなくてさ。おれの仕送りだけで生活してたらしいんだ。

幸子 大変なんだ…。
鈴木 でね、支払いがかなり滞ってて、残りの借金を全額払わないと、家が差し押さえられちゃうらしいんだ。

幸子 え、差し押さえって、家がなくなっちゃうの？
鈴木 そうなんだ。それを聞いておれも何とかしたくて、いろいろと手を尽くしたんだけど、よい案がなくてさ。

幸子 残りの借金って、いくらなの？
鈴木 300万…。
幸子モノローグ え、そんなに…。
ナレーション 一瞬、そう思った。でも、彼には言ってなかったが、わたしには500万円の貯金がある。これには手を付けたくなかった。でもそれ以上に、せっぱ詰まって今にも泣き出しそうな彼の顔を見ているのがたまらなかった。

幸子 わたしが貸してあげるよ。
鈴木 いや、そういうわけにはいかないよ。君からそんな大金を借りるなんて、ダメだよ。

幸子 心配しないで。その代わりに、一つお願いを聞いて。今週の土曜日、友達とトリプルデートと一緒に行って。
鈴木 それは全然OKだけど、こんなこと君にお願いしていいのかな。
幸子 いいんだってば！ 明日も必ず来てね。その時持ってくるから。
ナレーション 翌日、彼は本当に申し訳なさそうにお金を受け取った。その日は週末のデートの話で大いに盛り上がった。彼はいつも以上に優しくて、彼との距離がぐーんと近くなった気がした。
待ちに待った週末がやってきた。わたしは目いっぱいのおしゃれをして、みんなとの待ち合わせの場所に来た。まだ30分も早い。初めて彼と過ごす一日を想像しながら、わたしは一人待っていた。

<後編>

ナレーション

わたしは大手化粧品会社でOLをしている小松幸子。高卒で入社 2 年目の二十歳。今会社の友達 2 人と待ち合わせをしている。ふとしたことでわたしに彼氏がいることがバレ、今日みんなで自分の彼氏を連れてきてトリプルデートをすることになったのだ。でも本当を言うと、わたしの相手の鈴木さんはまだ彼氏と呼べるかどうか分からない。わたしの唯一の趣味が貯金で、会社のお給料だけではためがいがないので、友達には内緒だが、スナックで夜のバイトをしている。鈴木さんとはそこで知り合った。青森出身で田舎の人特有の無邪気な笑顔と優しい人柄に、いつしかわたしは心を引かれてしまったのだ。

(効果音)

(エコー、回想)

鈴木

実はおやじの借金の返済が滞っていて、家が取られちゃいそうなんだ。

幸子

借金って、いくらなの？

鈴木

…300 万。

幸子

分かった。わたしが貸してあげるよ。

鈴木

いや、そんな大金、君から借りるなんてダメだよ。

幸子

心配しないで。明日持ってくるから。ね？

(回想終わる)

ナレーション

若いのに、自分の生活費を切り詰めてたくさん仕送りをしている親孝行の鈴木さんが、思い詰めた表情で話してくれた。そんな悩みをわたしに打ち明けてくれたことがうれしかったのと、いつも明るい彼が今にも泣き出しそうな顔をしているのが耐えられなくて、わたしは大切な貯金の中から彼にお金を貸すことにした。

のぞみ

おはよ、幸子！ 早いねえ。もう来てたんだ。まだ 15 分前だよ。あ、彼初めてだったよね。本村君です。

本村

本村信治っていいです。よろしく。プーって言うと聞こえが悪いけど、神学校に行く準備をしています。

幸子

シン…学校？

のぞみ

彼ね、牧師になりたいの。

幸子

牧師って、キリスト教の？

本村

ええ、神学校って牧師や宣教師になるための学校なんです。

幸子

へえー、そうなんだ。

ナレーション

のぞみの彼が聖人君子だなんて、驚いた。のぞみんちは大金持ちだし、のぞみも将来は独立して、たくさんお金を稼ぎたいって言ってたから、相手の彼も、てっきり将来を約束された青年実業家だとばかり思っていた。本当に人間

てよく分からない。

のぞみ あれ、例の彼は？

幸子 うん、まだ見たい。

のぞみ 今日来るんだよね？

幸子 うん、来るって言ってたけど…。

ナレーション わたしは何となく不安になった。

幸子モノローグ 鈴木さん、来てくれるよね？

ナレーション ふと時計を見ると、もう約束の時間になっている。

ともみ おっはよ！

小林 おはようございます。

のぞみ あ、おはよう！ 待ってたよ～。

ともみ ね、ね、早く行こ。

小林 おいおい、まだちゃんとあいさつもしてないじゃないか。

ともみ そっか。ええと、小林^{はじめ}君です。

小林 小林です。よろしく。

(皆、口々に自己紹介)

のぞみ あと、幸子の彼がまだ来てないんだ。

ナレーション あいさつのあと、みんな何だか話が盛り上がっていたが、わたしは一人上の空で、一生懸命人込みの中に鈴木さんの姿を探していた。

ともみ ね、もう 15 分もたったよ。今日来られなくなったんじゃない？

のぞみ 彼って携帯持ってないの？

幸子 え？

ナレーション 言われて初めて気がついた。

幸子 そういえば、わたし、携帯だけじゃなくて彼の家の電話番号すら知らない。

のぞみ え？

ともみ 家の電話番号も知らないの？

幸子 だって、いつもお店に来てくれたから、電話なんかすることなかったし、いつも会えてうれしかったから、そんなこと気にしなかった。

小林 それにしたってデートを約束するくらいの仲なら、普通電話番号ぐらい言ったり聞いたりしないか？ さっちゃんの電話番号は聞かれたの？

幸子 (すすり泣き始める)

のぞみ 聞かれなかったの？

ともみ ええ?! そんなの信じらんない!

ナレーション 言われてみれば、みんなの言うとおりであった。なんか無性に不安になった。約束の時間を破ったことのない彼が、信じていた彼が来ない。なのに、こっちから連絡もできない。わたしは、電話番号も知らない彼のことを盲目的に信じ

ていた自分がとても情けなかった。

幸子 (激しく泣きながら) わたし、だまされたの？

ナレーション 周りにたくさん人がいることも忘れて、わたしはその場にしゃがみ、泣き出してしまった。

のぞみ 幸子、どうしたの？

ともみ ねえ、こんなところで泣くのやめなよ。

ナレーション 鉄砲水のように流れ出てくる涙をふきふき、わたしは、彼との出会いのこと、そして彼に大金を貸したことをみんなに話した。

小林 悪いけど、それって絶対だまされてるよ。

ともみ そうよね。もうドロンしちゃったかもね。もしかして、これって結婚詐欺？

本村 ちょっと待ってください。まだだまされたって決まったわけじゃないんですから。

のぞみ そうよ。約束の時間に来ないからって、すぐ悪者扱いしちゃダメよ。

幸子 でも、電話番号も聞いてないし、彼も聞いてくれなかった…。(泣く)

のぞみ ねえ、幸子。あなた、彼のこと信じてたんでしょ？

幸子 …うん。

のぞみ なら、とことん信じようよ。

本村 そう。なんか急に都合が悪くなったのかもしれないよ。

のぞみ それにさ、もしだよ、もし彼にだまされたとしたっていいじゃない。理由はどうあれ、彼はそのお金が必要だったんだから。

幸子 のぞみは…、あなたはお金持ちだからそんなこと言えるのよ！ あのお金は、わたしが一生懸命働いてためたお金なのよ。わたしがずっと楽しみにして、それも、今だから言うけど、体力的には結構きつい夜のバイトまでしてためた、大事なお金なのよ。あなたに何が分かるって言うのよ！

ともみ ちょっと幸子、そんな言い方しなくても…。

のぞみ いいの。確かに、わたしには幸子にとって貸したお金がどれだけ大事ななんて分かんない。それに、信じていた人に裏切られたかもしれないって思ったら、怒りたくもなるよね。

本村 のぞみちゃんはね、いつも、将来独立してたくさんお金を稼ぎたいって言うてるし、家が資産家だから300万なんて大した金額じゃないって思ってるんだって思うかもしれないけど、実は彼女は、ご両親からは経済的な援助は一切受けてないし、これからも受けるつもりはないんだ。それに彼女は自分の夢に向かって貯金するだけじゃなくて、子供たちに奨学金をあげる団体に毎月寄付してるんだ。

ともみ え、のぞみってそんなことしてんの？ 偉ーい！

のぞみ 偉くなんかない。わたしね、中学のころから先生になろうかって思ってたんだ。

金八先生じゃないけど、先生になって、本当に生徒一人一人の才能を引き出してあげて、その人の人生を変えてあげようになりたいなって思ったの。でもわたしにはそんな才能が全くないって分かって、ものすごく落ち込んでいたときに、本村さんと知り合って、彼からいろいろ教わっているうちに分かってきた。わたしには、父譲りのマネーメイキングの知識がある。それを活用して、人に喜ばれる仕事でたくさんお金を稼げばいいんだって。

- 小林
のぞみ たくさんお金を稼いで寄付するってこと？
- そう。わたしが稼いだお金でたくさんの子供たちが教育の機会を得られて、人生を変えることができたなら、わたしの中学のころからの願いはちゃんとかなえられたことになると思うの。
- 本村
のぞみ 直接子供たちに接することはないけど、間接的に大勢の子供たちにいい影響を与えることができるよね。
- 幸子。わたしね、お金って神様から預かっているものだと思う。働いて得たお金を何に使うかで、何のために働いているかが決まると思うの。わたしは今している仕事が有意義だとは思えないけど、子供たちのためにお金を使うとき、「また今月も子供たちの将来のために頑張ろう」って思うんだ。
- 本村
のぞみ 聖書にこんな言葉があるんです。「金銭を愛することはあらゆる悪の根である。」イエス・キリストを裏切ったユダも、お金を愛していた。幸子さんもしかしたら、今までお金を愛していて、お金が、見えない神様のようになったのかもしれない。でも、幸子さんは彼を信じてお金を貸した。たとえだまされていたとしても、僕はそれってよいお金の使い方だと思うな。働いたお金を、本当に人の必要のために使うって、すごく有意義なことじゃないのかな。
- 幸子モノローグ
のぞみ そっか…。今までは、ただためるのが目的、それがすべてだったけど、彼の必要のために使うことができたんだ。一緒にいるときによく思ったっけ。「この人のために何かしてあげたい」って。いっか。だまされたなんて信じたくないけど…もういい、どっちだって。だって、彼のこと愛してたんだから。
- ともみ
のぞみ うーん。難しくてよく分かんない。ねえ、一ちゃん、どう思う？ お金を人のために使うなんて、あんまし考えたことないし…。
- 小林
のぞみ お子様には分かんないんだよ。結婚しても、この僕に任せとけばいいの。さ、ディズニーランドでも行きましょうか、お嬢さん？
- ともみ
のぞみ あ、またそうやってともみのことバカにした～。一ちゃんでしょ、ミッキーのお面欲しいって言ったの？
- 小林
一同 おい、それは内緒だって言っただろう？
- (笑い)
- ナレーション その時だった。わたしはみんなの向こうに、顔を真っ赤にして走ってくる人の姿を見つけた。あれは？ …鈴木さん、鈴木健太さん！

幸子

鈴木さ～ん! ここ、ここー!

ナレーション

わたしは思わず、周りが振り向くような大声を上げて、彼のほうに駆け出していた。

(完)